The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	タリアイ・ヴェーソス : その生涯と主な著作活動について
Author(s)	朝田, 千恵
Citation	IDUN ー北欧研究ー. 2025, 25, p. 117-127
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100755
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

［研究ノート］

タリアイ・ヴェーソス
その生涯と主な著作活動について

朝田 千恵

1. はじめに

Tarjei Vesaas タリアイ・ヴェーソス（1897-1970）はニーノシュクで執筆した，ノルウェーの国民的作家である．近年，世界的な再評価の進む作家であり，日本でもヴェーソス・コレクションとして 3 作品[1]が邦訳中である．本稿では息子 Olav Vesaas オーラヴ・ヴェーソスによる父タリアイの伝記などをもとに，ヴェーソスの生涯と主な著作活動を紹介したい．

NORLA（ノルウェー文学海外普及協会 Norwegian Literature Abroad）[2]によれば，2004-21 年には NORLA の助成を受けて 26 カ国語，のべ 61 作品が翻訳出版された．グルジア語（14 作品），フランス語（9 作品），ドイツ語（5 作品）が言語別の翻訳作品数のトップ 3 である．とくに評価の高い *Is-slottet*（『氷の城』）が 18 カ国語，*Fuglane*（『鳥』）は 16 カ国語に翻訳されている．

2. 生い立ち

タリアイ・ヴェーソスは 1897 年 8 月 20 日，テーレマルク県ヴィニエのヴェーソス農場の長男として生まれた．父親は定期的にクリスティアニア新聞を読み，冬には夫婦揃ってランプの明かりで本を読みながら幾晩も過ごす家庭だった．父は農場の仕事をタリアイに教えようとしたが，母親は長男に農場を継ぐ気もその資質もないことに早々に気づいていた．ヴェーソス農場は森の奥深くにあり，タリアイにも狩猟の腕はあったが，猟よりも自然そのものに魅了されていた．語りかけてくるような自然とその美しさは，のちの著作で多分に表現されている．
タリアイは国民学校卒業後の冬をヴォス国民高等学校（フォルケホイスコーレ）で過ごした．国語論争[3]が活

---

[1] 国書刊行会 タリアイ・ヴェーソス・コレクション 『氷の城』（2022 年既刊），『鳥』（2025 年予定），*Vindane*（『風』2025 年以降予定）

[2] https://norla.no/en/news/news-from-norla/classic-of-the-month-tarjei-vesaas-the-birds-and-the-ice-palace

[3] ナショナリズムと言文一致運動のなか，ノルウェー語公用文語をデンマーク語由来のブークモール bokmål（当時の riksmål）とノルウェーの方言を基にしたニーノシュク nynorsk（当時の landsmål）のどちらにするかという激しい国語論争が繰り広げられた．結果的に，両方とも公用文語として認めることが決定した．現在ニーノシュク使用者は 15%ほどで，内陸部

発だったころ，言語運動や農民運動に積極的に関わった学校である．この学校をながらく導いてきた校長 Lars Eskeland ラーシュ・エスケランの影響で言語や文学への情熱をさらに燃やすようになった. 首都クリスティアニア(現在のオスロ)の衛兵として 7 ヶ月間 (1918-19 年) 兵役に就くが，タリアイにとっては 1920 年前後がもっとも孤独な時期だった．この困難な時期を経た若きロマンティスト，ヴェーソス最初期の文章は悲劇的でセンチメンタルなものだが，書くことはタリアイに豊かな幸福感をもたらした．しかし文筆業を認めようとしない父は作品を読もうとせず，ふたりのあいだには確執が残った.

3. 作家デビューと旅の 20 年代

1923 年，小説 *Menneskebonn*『人間の子』で作家デビュー．これを含め，続けて発表する初期作品では，厳しい生活環境を背景に，人間を寄る辺なき孤独で小さな存在として描いている.

1925-33 年のあいだにノルウェー作家協会から何度も奨学金を得て，ヴェーソスはヨーロッパ各地へと長期滞在に出かけた．戦間期の旅行を，あとでこのように振り返っている.「少し世界に出ることは非常に重要だ. 明らかな変化に繋がるし，さらに重要なことには，すぐさま認識されずとも，後になんらかの恩恵となる変化，また未知の結果をもたらす変化へと繋がる」[4]．一番長く滞在し，とくに気に入っていたのがミュンヘンだが，国外で執筆した小説にも外国生活を匂わせる描写はほとんど見られない．ミュンヘンで書いた小説 *Dei svarte hestane*『黒い馬』(1928) も，長年農場で馬と暮らしてきた経験から，馬がたくさん登場する本を書きたかったと語っている. 初期の作品には新ロマン主義の傾向が見られるが，『黒い馬』以降は現実的かつ現代的になっていく.

4. *Det store spelet*『偉大なるサイクル』と 30 年代

1933 年，ヴェーソスは小説 *Sandeltreet*『サンダルウッドの樹』を発表．ヴェーソスの息子オーラヴによれば過小評価されている作品で, 1940 年代以降の実験的文体の兆しが見られる.

ミュンヘンからの帰郷翌年，*Det store spelet*『偉大なるサイクル』(1934) を発表すると，同時代の評論家が絶賛．これがヴェーソスにとっての文学的な突破口となった. この作品の明らかな生気論[5]的要素は, 続編小説 *Kvinnor ropar heim*『女たちが家に呼ぶ』(1935) にさらに色濃く表れる.『偉大なるサイクル』の主人公

および西海岸に多い.

[4] Vesaas, Olav. 1997. s.6

[5] 有機体には無機的物質の機械的結合以上の生命原理があるとする説.

Per Bufast ペール・ブーファストは農場の長男である．農場を出ていかせまいとする父親に反抗するが，自分も，農場の移りゆく季節や苗付けから収穫，誕生から死という，世代から世代へと受け継がれていく大きなサイクルの一部であることに次第に気づく．この悟りにより，ペールは自分の運命を受け入れる．ヴェーソスはこの作品を大地への讃歌として，そして孤独を好む若者の横顔として書いた．自らの生い立ちに重なる部分は多いが，次のように述べている．「ぼく自身の子ども時代をそのまま写し取ったものととらえるのはまちがいだ．登場人物やできごと，結末は同じではない．それでも，ここに描いたことは真実である．現実における明らかな事実よりも，事実に即している」[6].

ヴェーソスは計 4 冊の短編集を出したが，初期 2 冊 *Klokka i haugen*（1929）『盛土のなかの鐘』と *Leiret og hjulet*（1936）『泥道と車輪』はほとんどがこのブーファスト作品と関連のあるモチーフやテーマを用いている．泥道は瞬間的なものを，車輪は運命と止めることのできない時間を表し，『偉大なるサイクル』と同じ生気論的な考えが背景にある．

1930 年代，ヴェーソスは自身の人生を多分に映し出すかのような登場人物をもうひとり生み出した．Klas Dyregodt クラース・デューレゴット，デューレゴット・シリーズの主人公である．シリーズ 1 作目の *Fars reise*『父の旅』（1930）は大きな貯水池が決壊するかもしれないという災害への恐怖を背景に，人生への恐れと運命を信じる気持ちの葛藤を描く．続く *Sigrid Stallbrok*『スィグリー・スタルブローク』（1931）と *Dei ukjende mennene*『見知らぬ男ら』（1932）はクラースの成長譚で，4 作目の *Hjarta høyrer sine heimlandstonear*『心には故国の響きが聞こえる』（1938）にはやや明るい雰囲気が漂う．しかしシリーズ全体を通して孤立と孤独がテーマで，孤独な少年クラースは人生の意味と自分の居場所を探し求め，何度もその運命にぶちのめされる．落胆のあまり，ついには自分で人生を終わらせようとするが，「自分の主人はお前自身だよ，クラース」と語りかける高齢の女性のおかげで自死を思い留まる．このことばはクラースを解放し，改めて自分の人生と向き合わせる．

『偉大なるサイクル』を出版した 1934 年，タリアイはノルウェーの詩人 Halldis Moren ハルディス・モーレンと結婚した．ふたりはそれぞれの作品を通して，長年，互いに魅せられていたが，初めて出会ったのは 1931 年のこと．ハルディスはスイスのノルウェー領事館で秘書の仕事をしていた．ヴェーソスには故郷ヴィニエにおじから買い受けたミッドボー農場があり，ふたりはここに居を構えることにした．ハルディスは詩に，ヴェーソスは小説に取り組み，それ以外の時間はともに農場の建物の塗装や改築に励んだ．文筆家としても個人としても，夫婦に

[6] Vesaas, Olav. 1997. s.7

とって成長の時期だった.

5. 第二次世界大戦の勃発と実験的文体の 40 年代

第二次世界大戦の勃発はヴェーソスにとって大きな衝撃だった．文明化した人間がこんな道を突き進むのはどうしてなのか．どうすれば人間があんな野獣のようになれるのか．集団催眠をかけられているのか．これは *Kimen*『種』(1940) 執筆中の夏，ヴェーソスが取り組んだ疑問である．この作品は戦争を直接ではなく，寓話的，象徴的に描く．小さな島で起きた事件を巡って共同体に生まれた小さな不信感が，やがて大きな暴力や残虐な行為へとつながっていく.

この 1940 年はヴェーソスにとって，考え方の転換点となった.『種』を自身の著作活動における「区切り」と呼び，出版社を変え，現代的な正書法も使い始めた. 平易なことばと日常の語り口, 短く単純な文章がヴェーソス最大の特徴だが, 1940 年代はそこに通じる文体や, 現実主義にとらわれない小説の形態をあれこれ実験的に試していた.

終戦前の冬に執筆した *Huset i mørkret*『暗闇のなかの家』(1945)も，当時のノルウェーにはタイムリーで，タイムレスな寓話小説である．この家とは「占領下のノルウェー」を指し，地下活動のための秘密の通路や危険な空間をもつ迷宮のような家として描かれる．様式化した人物や空間により，占領下の集団や人間関係，空気を表現することに成功し，高く評価された．この 2 作でヴェーソスはモダニズム作家として認められるようになり，1947 年には，国の芸術家給与の受給が決まった.

Bleikeplassen『漂白場』(1946)と *Tårnet*『塔』(1948)を執筆したのは，実は『暗闇のなかの家』以前の占領下のことで，原稿は缶に入れて，終戦まで地中に埋めて隠してあった.『漂白場』は汚れた衣服を洗って漂白する洗濯屋が舞台である. その作業に呼応するように主人公ヨハンは精神的に汚れ，洗われ，清められ，そして妻によって救われる.『塔』は複雑な罪悪感と，父ランドルフと息子ニルスの犯した罪の理由の隠蔽が描かれる．*Signalet*『シグナル』 (1950)では，カフカやベケットを思わせる不条理な世界が描かれる. 列車駅で乗客や旅行客が発車を待っているが，いつまで経っても発車の合図は出ない．不安のあまり人々は実際になにか行動に出ようとする気持ちが麻痺し，受け身になっていく.

6. 代表作 *Fuglane*『鳥』の 50 年代

長編小説で知られるヴェーソスだが, 1950 年代には優れた短編小説も多数執筆している．すぐにラジオドラマ向けに脚本化されたものも多い．13 話を収めた短編集 *Vindane*『風』(1952) は「ヨーロッパ最高の本」と評され，権威あるヴェニ

ス賞を受賞した．このなかの *Vesle-Trask*「ちびすけ」に登場する幼い生徒は，知識は豊かだが，人前で質問されると答えられない．戦前に執筆した *Tusten*「まぬけ」の若者マッティスは頭の回転が遅く，仕事もうまくできないため，集落では「まぬけ」と呼ばれている．ヴェーソスの傑作小説の主人公は，子どもや大人になりつつある若者であることが多い．短編集 *Ein vakker dag*『ある美しい日』(1953)では，とくに *Det snør og snør*「雪が降る，雪が降る」の評価が高い．

小説 *Vårnatt*『春の夜』(1954)では穏やかな夜，14 歳のハルスタインが姉と留守番をしていると，妊婦を含む大人たちが助けを求めてやって来る．大人同士の対立が家に緊張をもたらすが，傾聴力のあるハルスタインは，この一夜のできごとを観察し，理解しようとする．

短編小説「まぬけ」のマッティスは 1957 年，長編小説 *Fuglane*『鳥』の主人公として再び登場し，その描写はヴェーソス作品の最高点と評されることになった．まともに仕事をこなせないマッティスのことを周囲は愚か者とみなし，マッティスの見ている世界や考えていることに無理解を示す．自然に対する観察眼と詩人のような感性をもつマッティスはある夜，自宅上空を渡るヤマシギに気づき，これを姉との生活に前向きな変化が訪れる兆しと考える．合理的で現実的な世界からつまはじきにされているマッティスだが，自身のアイデンティティーにも関わる「なぜこんななの？」という疑問を常に抱え，哲学者のようでもある．

あるインタビューで作家は，主人公マッティスを自分の自画像だと語っている．『鳥』は「いわゆる芸術家の人生についての本である．芸術家はしばしば頼りない子どもであり，現実的な人ならファンタジーとでも呼ぶであろう，自分の夢や考えの虜になっている」[7]．ヴェーソスは舟を漕ぐのが得意な点もマッティスと共通しており，湖や大きな川の水面を眺めるのが大好きだった．ヴェーソス作品のほとんどが，故郷テーレマルクを思わせるノルウェー内陸部を舞台とし，その背景描写にはいつも水の流れがある．しかしヴェーソスは故郷の人々や自然にモチーフを見出だしながらも，普遍的なテーマを模索し，人々の抱える時代を問わない疑問について考えていた．

7. Is-slottet『氷の城』の 60 年代

66 歳で執筆した小説 *Is-slottet*『氷の城』(1963) も，舞台の大半が川や凍った滝の周りに設定されている．友情が芽生えかけの 11 歳の女の子シスとウン．初めてシスがウンを訪ねた夜，ふたりは友人として心を通わせた気がしたが，ウンにはなにか秘密があるようだ．翌朝シスと顔を合わせる勇気の出ないウンは，この日だけ学校をサボることにした．川の先の滝にできているという不思議な氷の

[7] Vesaas, Olav. 1997. s.8

建造物を探検しに出かけ，そして忽然と姿を消してしまう．残されたシスは喪失感と後悔，ウンへの誓いを守ろうとする固い決意に，心を冷たく閉ざす．ヴェーソスは，押しつぶされそうな状況にいる少女たちの考えや感情を鮮烈かつ説得力をもって描写したことで，当時の小説の最高傑作と評され，1964 年，北欧理事会文学賞を受賞した．

ヴェーソスの小説は簡潔な語りで読者を引き付けるが，同時に詩的で象徴的，連想的で，どこかとらえどころがない．できごとは頻繁に中断し，ストーリーの合間に散文詩や叙事詩的文章が登場する．ふたりの秘密の約束やウンの過去について訊ねられると，ヴェーソスは「氷の城の根底にあるものは，あまりにも繊細で言い表すことができない．本が良いものであるとき，本は秘密主義であるべきだ」[8]と答えている．すべては明らかにしない，説明しないというスタイルのせいで，作品はますます魔法めいたものになる．

『鳥』の主人公マッティスは「なぜこんななの？」という疑問を常に抱えていたが，ヴェーソスもまた，なぜ人生を賢明に生きようとする力と人生を破壊しようとする力があるのか，いつも不思議に思い，そしてこの手の疑問には答えがないことも理解していた．しかし死の危機に直面し，自分や他人の人生を終わらせようとする孤独な人が，周囲の力－－ケアや思いやり，他者の愛によって救われる姿を描く．『氷の城』でも，シスは最終的にウンのおばさんや周囲の見守りによって悲しみと孤独から立ち上がる．ヴェーソス作品では，救済の手が高齢の女性であるケースが多い．ヴェーソス自身，実家での唯一の理解者が母親だったことも影響しているのだろう．「これはおそらく，人間ならだれもが孤独な瞬間に取り組むべき疑問だ．だれか，ぼくのことを気にかけてくれている？　ぼくには友だちがいる？　時間をかけてこの疑問を熟考すれば，その重要性の大きさを悟る．ぼくたちはだれかの思考のなかにいるということをわかっていなければならない－－すごく単純ですごく難しいことだ」[9]．

『氷の城』の前作 *Brannen*（1961）『火事』は，核兵器開発の進む冷戦の危機の時代に執筆され，ヴェーソス作品のなかでも神秘的で不気味な物語と評される．アパートに越したばかりの青年ヨンは火事で焼け出され，行く先々で陰鬱で悲惨なできごとや出会いが続く．火は不穏な現代世界をイメージさせる．ヴェーソスは社会論争に声高に加わることはなかったが，人間がどれほどの悪をなせるか，人間には希望があるのかを常に考えていた．

Bruene『橋』（1966）も『氷の城』と似たところがあり，写実的な描写と詩的

[8] Vesaas, Olav. 1997. s.9
[9] Vesaas, Olav. 1997. s.11

で象徴的な文章が交互に表れ, 物語が深まっていく. ジャンルを越えた散文 *Båten om kvelden*『夕刻の舟』(1968) は短編形式の自叙伝的小説と称される. ヴェーソス自身による最後の本だが, 過去に登場したモチーフやテーマを取り上げ, 探求する姿勢は変わらない. これをヴェーソス最高の作品とする人も多い.

8. ヴェーソスの詩と戯曲

最後に詩人と劇作家としてのヴェーソスについてまとめておこう. 1923 年の作家デビュー前から詩作はしていたが, 初の詩集 *Kjeldene*『泉』が出たのは 1946 年のことである. 詩人である妻ハルディスに対する遠慮もあったのだろう[10]. 続く 10 年でさらに 4 冊の詩集を刊行. 小説家としてほど革新的ではなかったが, 1940, 50 年代の先進的なモダニズム詩人のひとりと見なされている.

『泉』には伝統的な韻律形式と自由詩の両方が含まれるが, のちの詩集は自由詩がほとんどである. 近く／遠く, 安全／安心できないもの, 馴染みのもの／見知らぬもの, 移ろいやすいもの／変わらぬもの, 幸福な経験／恐怖体験の対比が多々見られる. また, 旅や放浪などの古くからのモチーフが詩の根底にあるが, 初期の詩集では, 冷戦や原爆に対する恐怖[11], 歴史的テーマや倫理的関心もたびたび取り上げている.

ヴェーソスの詩人としての最高傑作は, 1970 年の没後に出た詩集 *Liv ved straumen*『流れのそばの人生』である. テーマは幅広く, あちこちに見られるユーモアは, 詩人ヴェーソスの独創性を特徴づける, 大きな矛盾や問いかけを和らげ, 詩を身近に感じさせる. ヴェーソスは最後の夏, 近づきつつある死とともに, 自分の幸福と生きる力を顧みた詩を多数残した. そのため, 最後の小説『夕刻の舟』と同じく, 最後の詩集『流れのそばの人生』には自叙伝的要素が濃く表れている. 病気のため, タリアイ・ヴェーソスは 1970 年 3 月 15 日に亡くなった. 妻ハルディスの手により,『流れのそばの人生』は同年秋に出版された. 息子オーラヴによれば, 別れを告げる数多くの詩のなかでもとくに *Bakkane heime*「故郷の丘」にヴェーソスの精神が感じられると言う.

戯曲については, ヨーロッパで舞台芸術に触れたヴェーソスは, とくに表現主義的演劇に惹かれ, 自身もモダニズム演劇を執筆していた. しかしノルウェーの

---

[10] 2022 年夏, ミッドボー農場を訪問した際, タリアイとハルディスの娘 Guri Vesaas グーリ・ヴェーソスさんにお会いした. 父が母に贈った初の詩集を見せてくださり, そこには「これから同僚となるきみへ」と書き込まれていた.「母にはずっと, 詩だけは自分の領域という思いがあった」とのこと.

[11] 余談だが, 2022 年のヴェーソス生誕 125 年を祝うヴィニエ文学祭では, ヴィニエ市長が開式にあたりロシアによるウクライナ侵攻に触れ, Regn i Hiroshima「ヒロシマの雨」(*Leiken og lynet*『遊びと稲光』1947 より) を朗読した.

出版社も演劇界もさほど興味を示さなかった．*Prosten*『牧師』（1925），*Guds bustader*『神の住まい』[12]（1928）はどちらも酷評を受け，反戦演劇 *Ultimatum*『最後通告』(1934) も賛否両論で，ヴェーソスの戯曲に対する評価は概ね芳しくなかった．*Morgonvinden*『朝風』（1947）は占領下のレジスタンス活動のなかのできごとを描いている．1953 年に小説『漂白場』を舞台化したのが劇場での最大にして唯一の成功で，海外公演のほか，テレビ放映（1958）もされた．しかし幸運にも社会のニーズがあり，50 年代以降はラジオドラマの脚本を多数手掛け，好評を得た．*Vår eigen song*『我々自身の歌』（1958）は，過去のラジオドラマの短い脚本 3 作（*Laudagskveld*『土曜の夜』，*21år*『21 歳』，*Avskil med treet*『樹との別れ』）を書き直したものである．

9. おわりに

作家ヴェーソスは社会に強い関心をもちながらも，作品執筆と新聞への寄稿のほかは，公的な場での議論にほとんど参加することがなかった．国からの名誉給与，王宮庭園内の名誉住宅グロッテンでの生涯居住権や聖オーラヴ勲章の司令官十字章も，自分の性に合わないから，と辞退している．恐怖と不安に対する洞察力に長けた，勇気あるモダニズム作家でありながら，ひとりの人間であること，穏やかでごく普通でバランスの取れた田舎者であることにこだわり，生涯を故郷テーレマルクのミッドボーで過ごした．ノルウェーの片田舎を舞台としながら，普遍性に満ちた作品を生み出してきた背景には，ヴェーソスのこのような人柄があり，これがいまも読者を惹きつける理由のひとつなのだろう．

1964 年，ヴェーソスはヴェネツィア賞と北欧理事会文学賞で得た賞金で「タリアイ・ヴェーソス新人賞」基金を設立した．現在も毎年晩夏に開催されるヴィニエ文学祭において，その年最高の純文学作品を執筆した新人作家に対し，ノルウェー作家協会が新人賞を授与している．

[12] *Frå fest til fest*『宴から宴へ』というタイトルで上演.

Tarjei Vesaas

Hans liv og forfatterskap

Sammendrag

Chie Asada

Tarjei Vesaas (1897-1970) var en norsk forfatter som skrev på nynorsk. De siste årene har det vært en fornyet interesse over hele verden for hans arbeid. Han debuterte som romanforfatter med *Menneskebonn* i 1923, og hans litterære gjennombrudd kom med romanen *Det store spelet* (1934). *Kimen* (1940) og *Huset i mørkret* (1945) gav ham anerkjennelse som moderne forfatter, og han fikk tildelt Statens kunstnerlønn fra 1947. Med novellesamlingen *Vindane* (1952) mottok han Veneziaprisen. Mattis som er hovedpersonen i *Tusten*, en novelle i *Vindane*, møter vi igjen i romanen *Fuglane* (1957). Skildringen av Mattis blir sett på som høgdepunktet i Vesaas forfatterskap. Med romanen *Is-slottet* (1963) mottok han Nordisk råds litteraturpris i 1964. Her får vi innblikk i tankene og følelsene til to unge jenter i deres hver for seg intense situasjon. Vesaas hentet motiver fra folk og natur i sine hjemlige trakter og brukte enkle og daglige ord og uttrykk. Samtidig rørte han ved universelle temaer og spørsmål som mennesker har stilt gjennom tidene. Det er det som tiltrekker lesere den dag i dag.

付録 タリアイ・ヴェーソスによる作品

長編小説

Menneskebonn	1923	『人間の子』
Sendemann Huskuld	1924	『使者フースクル』
Grindegard. Morgonen	1925	『グリンネ農場　朝』グリンネ 1
Grinde-kveld, eller Den gode engelen.	1926	『グリンネの夜 良き天使』グリンネ 2
Dei svarte hestane	1928	『黒い馬』
Fars reise	1930	『父の旅』デューレゴット 1
Sigrid Stallbrok	1931	『スィグリー・スタルブローク』デューレゴット 2
Dei ukjende mennene	1932	『見知らぬ男ら』デューレゴット 3
Sandeltreet	1933	『サンダルウッドの樹』
Det store spelet	1934	『偉大なるサイクル』シリーズ 1
Kvinnor ropar heim	1935	『女たちが家に呼ぶ』シリーズ 2
Hjarta høyrer sine heimlandstonar	1938	『心には故国の響きが聞こえる』デューレゴット 4
Kimen	1940	『種』
Huset i mørkret	1945	『暗闇のなかの家』
Bleikeplassen	1946	『漂白場』
Tårnet	1948	『塔』
Signalet	1950	『シグナル』
Vårnatt	1954	『春の夜』
Fuglane	1957	『鳥』
Brannen	1961	『火事』
Is-slottet	1963	『氷の城』
Bruene	1966	『橋』
Båten om kvelden	1968	『夕刻の舟』

短編小説

Klokka i haugen	1929	『盛土のなかの鐘』
Leiret og hjulet	1936	『泥道と車輪』
Vindane	1952	『風』
Ein vakker dag	1959	『ある美しい日』

詩集

Kjeldene	1946	『泉』
Leiken og lynet	1947	『遊びと稲光』
Lykka for ferdesmenn	1949	『旅行者の喜び』
Løynde eldars land	1953	『隠された火の国』
Ver ny, vår draum	1956	『我らの夢が新しくあり続けますよう』
Liv ved straumen	1970	『流れのそばの人生』

戯曲

Prosten	1925	『牧師』
Guds bustader (eller Frå fest til fest)	1925	『神の住まい』（『宴から宴へ』）
Ultimatum	1934	『最後通告』（1963 ラジオ劇化）
Morgonvinden	1947	『朝風』
Tøyveret	1952	『穏やかな天気』（ラジオ劇）
Det rare	1952	『奇妙なこと』（ラジオ劇）
Bleikeplassen	1953	『漂白場』
Sabelskuggen	1953	『サーベルの影』（ラジオ劇）
Blå knapp borte	1956	『失くなった青いボタン』（ラジオ劇）
Vår eigen song	1958	『我々自身の歌』
Regn i hår	1958	『髪に雨』（ラジオ劇）

散文集

Huset og fuglen (red. W. Baumgartner) 1971『家と鳥』

参考文献

Vesaas, Tarjei. 1952. *Vindane.* Oslo: Gyldendal.

Vesaas, Tarjei. 1957. *Fuglane.* Oslo: Gyldendal.

Vesaas, Tarjei. 1963. *Is-slottet.* Oslo: Gyldendal.

Vesaas, Olav. 1995. *Løynde land. Ei bok om Tarjei Vesaas.* Oslo: Cappelen.

Vesaas, Olav.1997.”Tarjei Vesaas-Realist and Dreamer”, *Norwegian Literature. Special Issue Vol 37, No. 4/5. NORLA & MUNIN*. Oslo: Nordmanns-Forbundet. 4-11.

https://snl.no/Tarjei_Vesaas